

GE-3- i -02	D エコロジー論	第3学年	後期 選択	1.5単位
担当者	齊藤 基雄			
一般目標 (GIO)	<p>今日、世界各地において、社会経済システムの大量消費化は進行を続けており、その中心的な範囲は従来の先進国から、比較的人口の多い新興工業国へと急速にシフトしつつある。温室効果ガス排出量の上昇による広域的気候変動への懸念、生物資源の乱獲・大量採取等による生物多様性の危機、そして2011年3月の東日本大震災に伴う原子力発電所事故など、環境問題の地球規模化とその深刻化は、商品生産・流通・消費の各段階における資源エネルギーの消費ならびにその廃棄物の増大と、非常に密接な関係にある。</p> <p>しかしながらわが国の場合、環境問題への関心はこれまで、個別の地域住民や、特定種の動植物における環境被害の表面的現象と、事後的対応論にのみ集中しがちであり、原因論としての社会的・経済的背景にまで十分に踏み込まれているとは言い難い状況にあった。</p> <p>そこでこの講義では、環境問題と人間との関わりについて、人間が自然環境を改変してきた要因や背景としての社会経済システムに着目する。従ってここでは、自然環境のみならず、これらに影響を及ぼしてきた人間の生活行動の社会的・経済的諸要因についても、生態系(エコロジー)的視点で捉えるものとする。このような視点の導入により、私たちの生活が「持続可能」であるために何が必要かについて、思考できるようになることを目標とする。</p>			
到達目標 (SBOs)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 環境問題には諸々の種類があるが、これらが領域内完結型ではないことを認識する。 2. 消費社会の発達と、環境負荷の拡大との連関を説明できるようにする。 3. 環境問題の社会的・経済的背景を捉えることができるようにする。 			
受講心得・準備学習等	環境問題に関する新聞記事やその他のメディア報道等に日頃から親しむこと。特に、馴染みのない環境用語が出てきた場合は、その意味を事前に調べるのが望ましい。			
事後学習・復習等	毎回の講義内容を要約・把握の上、関心を持ったテーマがあれば、参考文献等にアクセスされるのが望ましい。			
オフィスアワー	通常は、講義終了後の30分間、非常勤講師室に在室中。			

授業の形式と各回の内容

授業の形式		講義形式とする。
回	項目	内容
1	エコロジー論の視点	環境問題を「エコロジー」という視点で捉えることの意義
2	人は環境をどう捉えてきたか(1)	環境思想におけるエコロジー論の生成
3	人は環境をどう捉えてきたか(2)	自然中心論と技術中心論、その他の環境思想
4	地球環境問題(1)	気候変動(地球温暖化)問題とその論点
5	地球環境問題(2)	生物多様性の危機とその論点
6	消費生活と環境問題(1)	環境問題における「ごみ問題」の概要と位置づけ
7	消費生活と環境問題(2)	原子力発電依存の是非とクリーン・エネルギーの可能性
8	消費生活と環境問題(3)	交通手段・まちづくりと環境負荷の関連性
9	環境行政における「持続可能性」論	環境政策において中心とされてきた「持続可能性」論の経緯
10	企業・研究機関の環境戦略	企業や研究機関が作成する「環境報告書」の役割とその実務
11	環境の「市場化」	市場メカニズムへの「環境の価値」の反映の可能性
12	消費生活様式の「持続可能化」	スローフード運動やシェアリング・エコノミー等の動向
13	環境教育の変遷と現状	環境教育において「エコロジー」はどのように認識されるか
14	エコロジー論の課題	予防原則の是非を論点に生態系維持のレベルを考える

成績評価の方法	学期末に実施される定期試験の成績により評価する。
成績評価の基準	定期試験の成績において100点満点中60点以上を合格とする。 なお、試験は小論文形式とする。その際、特定のテーマを出題するが、当該のテーマを扱った回だけでなく、その他の回で取り上げた内容も含めて、論理的にかつできるだけ横断的に関連づけた上で、選択した内容を的確に応用できているかを、採点にあたって最も重視する。
教科書	教科書は使用せず、毎回の講義でプリントを配布する。
参考書など	講義のなかで紹介する。

